

驚きの介護民俗学

それでも私は介護の仕事が続けていく

乃木坂スクール 令和6年11月27日 オンライン

1 デイサービスすまいるほーむとは

静岡県沼津市にある六車宅1階を改装した
地域密着型通所介護（小規模デイサービス）
（平成31年1月に現在地へ移転）

1日の定員10名
利用者は、事業対象者、要支援1の方から要
介護5の方まで。
登録者の9割が認知症とともに生きている方

スタッフは、生活相談員2名、介護スタッフ
3名（非常勤、短時間勤務も含め）、厨房ス
タッフ3名

1日の体制

生活相談員	1名
介護スタッフ	2名
厨房スタッフ	1名



すまいるほ一むの日常生活

ご本人がやりたいと思うことを大切に。







敬老会 すまいる劇団
令和6年の演目「今日も走るよ みち子さん」



長年管理栄養士として働いてきたみち子さんの半生をお芝居に。父親が陸軍の連隊長であり、地主でもあったみち子さんの家庭は裕福だったが、戦後に一変。農地改革で貧乏のどん底へ。「軍人の娘だ」と石を投げられることも。それでも負けず、みち子さんは4里の山道を歩いて高校へ通った。

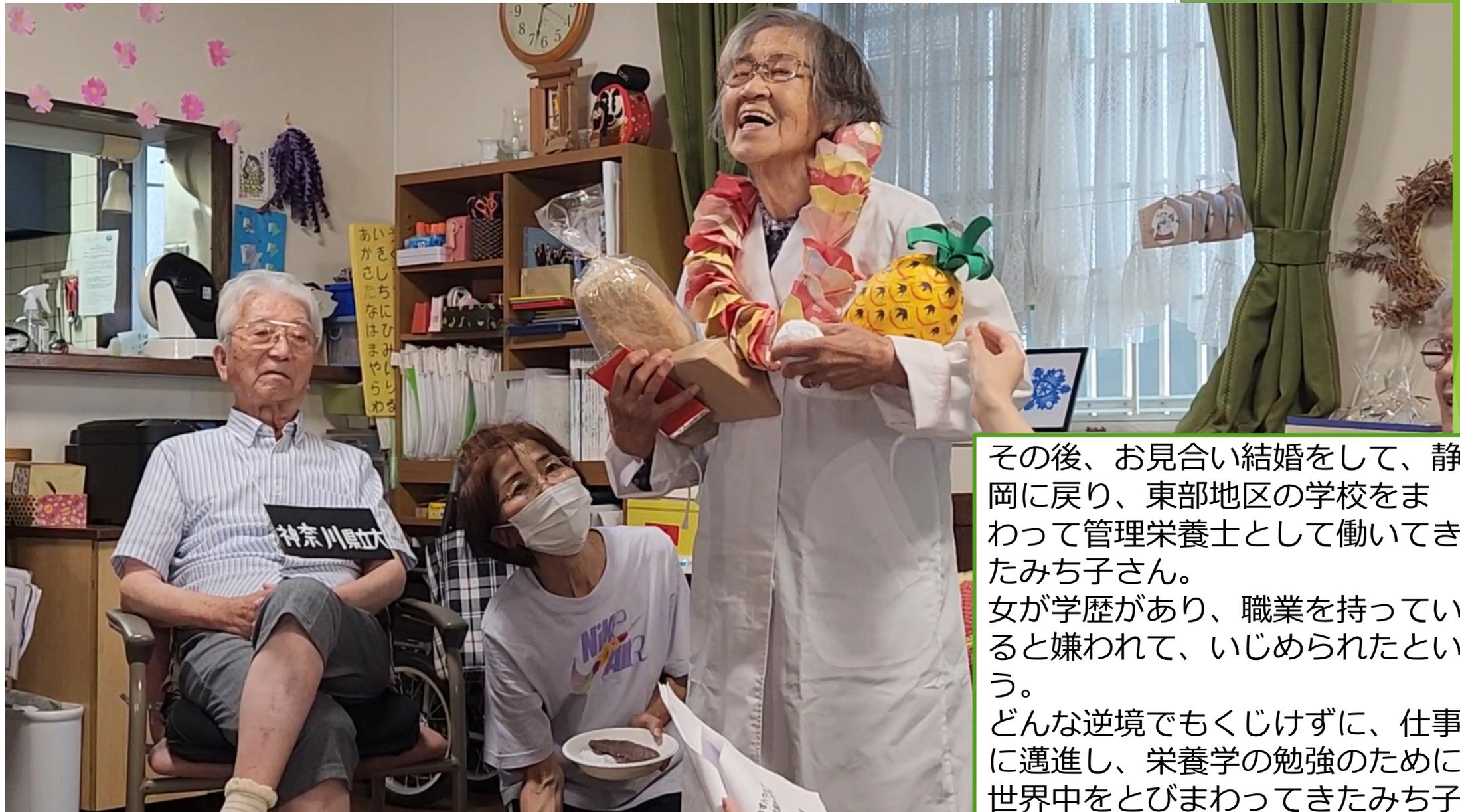


終戦後の困窮の中、残った土地を売り、母親が縫い仕事をしてくれ、みち子さんは、第一回目の共通一次試験を通過し、念願の大学へ進学を果たす。横浜駅へ降り立った直後に「浮浪児」にお金を盗まれてしまい、授業料が払えなくなってしまうというアクシデントも。様々な困難を乗り越え、大学で栄養学を学び、卒業後は厚生省へ。厚生技官として地方をまわって仕事をした。



働いて得た給料で、お肉を買って食べたり、横浜の外国人しか行かないようなレストランで食事をしたり。それも栄養士としての勉強の一環だったという。

厚生省を退職した後は、横浜のミッションスクールで栄養士として勤務。アメリカ人の宣教師たちとの交流が、みち子さんにとっては大きな支えになったという。



その後、お見合い結婚をして、静岡に戻り、東部地区の学校をまわって管理栄養士として働いてきたみち子さん。
女が学歴があり、職業を持っていると嫌われて、いじめられたという。
どんな逆境でもくじけずに、仕事に邁進し、栄養学の勉強のために世界中をとびまわってきたみち子さん。楽しい人生だったという。



お芝居が終わった後、みち子さんは、すっと立ち上がり、こんな言葉を述べた。

「たまたまミッションスクールに勤めた時に、アメリカ人の宣教師たちが私の仕事を理解してくださって、そうか、こんなにわかってくださる方たちがいるんだと感じました。

日本というところは、女は家にいるものだという考え方が強かったので、私みたいに一つの職業を持って社会にとびだすなんて人、本当に嫌われました。

今の時代では考えられないと思います。そんな時代を生きてきた私です。」

2 支援を目的としない聞き書き

回想法 = 療法（利用者の側の変化）

- ・ 利用者の心身の状況を改善させるための支援を目的とする。
- ・ 語られた言葉よりも、対象者の非言語的表現や気持ちの動きが注視される傾向にある。

聞き書き = スタッフの理解を深める

- ・ 利用者さんがどんな人生を歩んでこられたのか、またその時代、その地域でどんな暮らしが営まれていたのか、を知ることが目的とする。
- ・ 記録として残したり、形に表現して継承するためにも、語られた言葉はできるだけ正確に書き留める。



聞き書きをまとめた形の例



「思い出の記」



「人生すごろく」



「思い出の味の再現」

「すまいるかるた」いろいろ

台風の後には、夜中だろうが、寝てても起こされて、はまぎ(浜木)を拾いに行っただよ。浜に山積みにして、塩気を抜く。塩気を抜かないと、燃したとき釜が傷むからね。

嫁に来ていちばん(一番)大変だったのは、燃木(もしき)の苦労だね。根方の兄さんが心配して、燃木を持ってきてくれることもあったよ。燃木が積んであると気持ちが悪かったよ。

けっこん(結婚)の世話をしてくれた姉さんには、言えなかったけれど、本当は夕ヶユキさんと結婚したかった。

海福さん、
いつまでも仲良く、
愛しい妻と一緒に
ながいき(長生き)
してください。

支援を目的としない聞き書きの「効能」

利用者さんを変えるのではなく、スタッフが変わる！

①利用者さんの人生が立体的に浮かび上がってくる

「何かができない」利用者さんから、「人生の先輩」へ

②利用者さんへの愛情が生まれる

いろいろと大変な場面でも、なんとなく許せるように

③ 「教えてもらおう」という立場で聞くことで関係性が変わる

利用者さんたち = 支援の対象者であるが、
より豊富な人生経験の持ち主でもある

一旦支援をするという立場から離れて、「教えてもらおう」という立場から、素直に驚いたり、わからないことを尋ねてみる

利用者さん／スタッフ 介護される人／介護する人
↓
教える人 / 教えられる人

⇒この関係性の逆転が、利用者さんと支援者としてではなく、一人の人間として向き合う第一歩となる

④利用者さん自身も人生を再評価できる

自分一人で自分の人生を振り返ったり意味づけるのは難しい

聞き手の素直な驚き

⇒自分の人生は結構いいものだったと、
自分の人生を受け入れていくことにつながる

⑤日常に対話の場が生まれる

利用者さん同士でお互いの人生について語り合う
スタッフも利用者さんへと悩み相談をしたりする
すまいるほーむのことは話し合って決める

⇒**確かなつながりがあることを実感できる**

3 「若い」と「死」に共に向き合う

(1) 利用者さんの死について

○必ず、みんなに仲間の死を伝えること

○お別れ会を開き、写真を見ながら思い出を語り合い、花を手向けて弔うこと

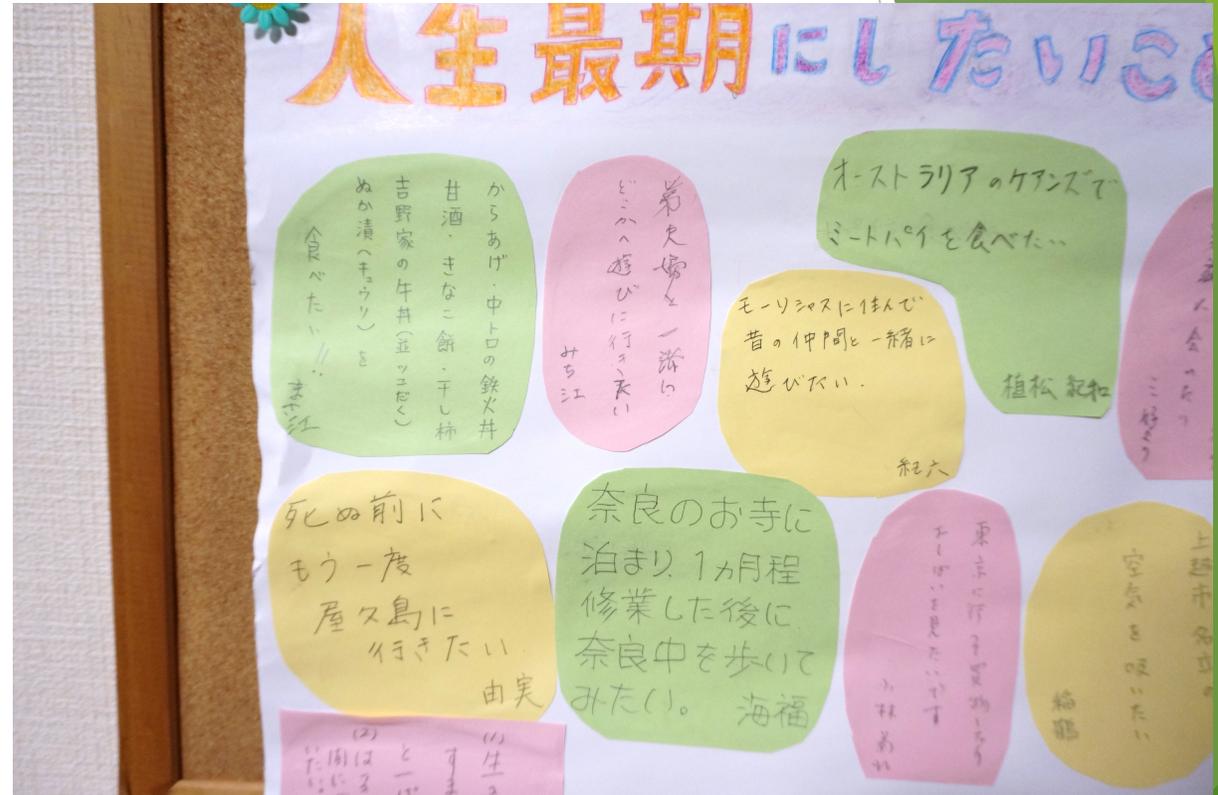


○「すまいるほーむのご先祖様」
としてデイルームに写真を飾り、
その方の思い出が自然に話題に
のぼること。



○七夕祭の時に、手作りの
灯籠に亡くなった方の名前
を書いて、思い出を語るこ
と。

○「人生最期にしたいこと」
を考えてもらうこと



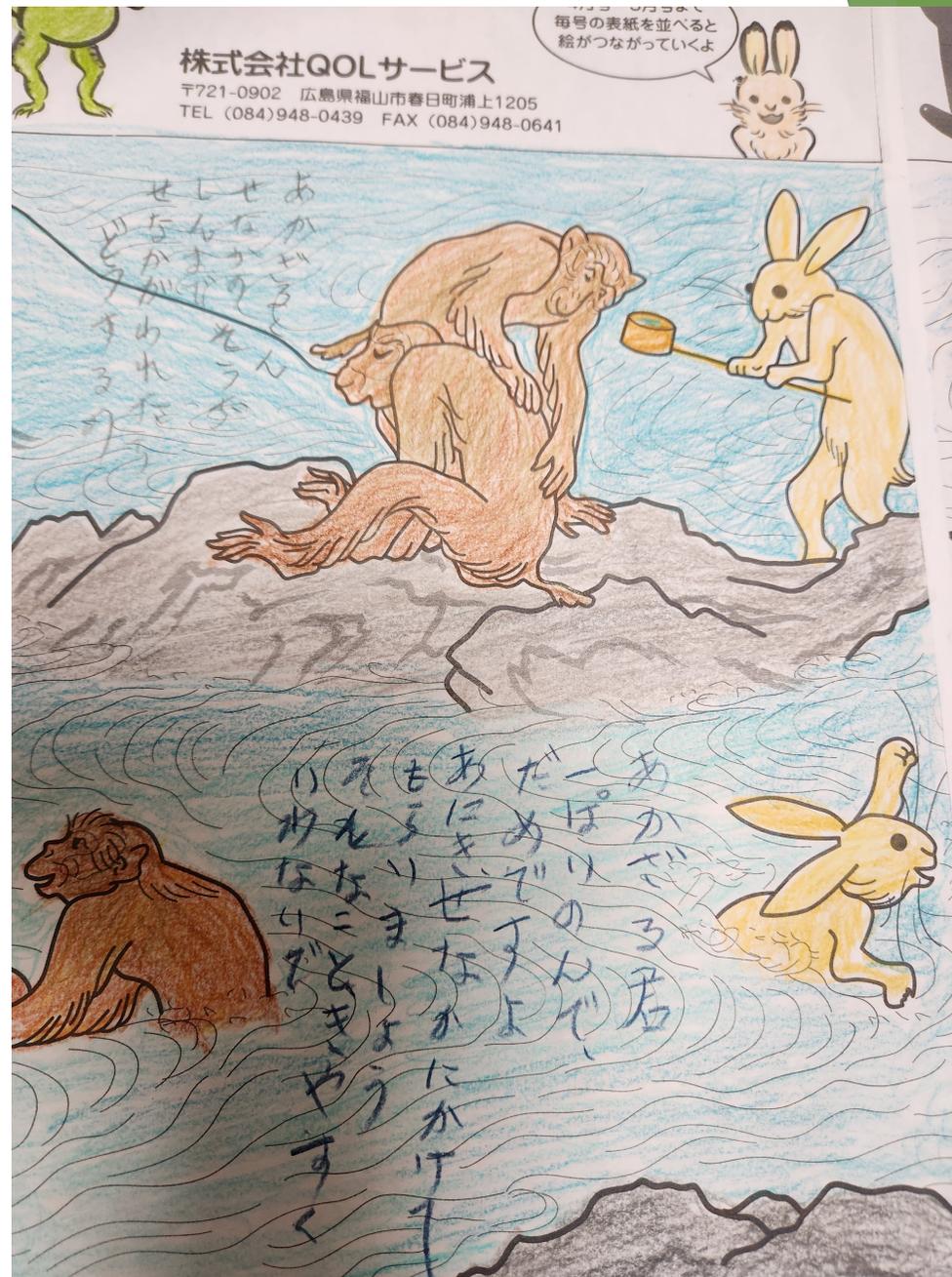
死をタブー視せず、みんなで共有すること、常に死を身近に感じること
⇒仲間の死の哀しみを受け入れていくことができる
⇒いずれ死を迎えることへの恐怖心が軽減していく

(2) 「できなくなること」 = 「老いること」 について

できることを見つけて、一緒に取り組んでいく。



新たな才能の発見



それでもそれがいつまでもできるわけではなく、できない
ことが増えていく
⇒喪失感や絶望へ 生きる意欲の低下

利用者さんたちの意識

- ・「できなくなること」＝「迷惑をかける」「役に立たなくなる」
- ・「他人に迷惑をかけるようになったらおしまい」という強迫観念

できないことが増えていっても、この一瞬、一瞬に喜びを感じ、「生きていてよかった」「もっと生きたい」と思えるように、私たちは共に「老い」と「死」に向き合っていきたい。
すまいほーむという場の様々なつながりが、生きる希望になってほしい。

4 私が怒っていること

(1) 在宅介護サービスの危機

(2) 「生産性の向上」の推進の強要

(3) 「自立支援」「重度化防止」の推進への疑問

(1) 在宅介護サービスの危機

7月4日のNHKニュースサイト

「介護事業者の倒産 今年6月までに81件 上半期で過去最多に」

訪問介護やデイサービスなど、在宅の高齢者を支える事業者の倒産が
顕著 訪問介護 40件、通所・短期入所 25件 等

倒産した事業者のおよそ8割にあたる64件が、売り上げ不振を挙げ
ている

背景—深刻な人手不足や光熱費等の高騰

業績低迷により、必要な人員を増やせない等の悪循環

* 令和6年度介護報酬改定による訪問介護基本報酬引き下げも影響か

すまいるほーむも他人事ではない

地域密着型通所介護の基本報酬引き上げ率 0.3% 焼け石に水！

そもそも、定められた人員基準が、実態に対応していない！

定員10名の地域密着型通所介護の人員基準

- ・管理者（常勤専従・介護職と兼務可） 1名
- ・生活相談員（介護職と兼務不可） 1名
- ・介護職員 1名（ちなみに、定員15名までは介護職員1名でよしとされている）

⇒管理者と介護職員が兼務できるので、生活相談員1名と介護職員（兼管理者）1名の**合計2名の配置**でよし、とされている

実際には、送迎や入浴介助、食事介助等で人手が必要なので、最低合計3名は必要。それでも、ぎりぎりの人数で、突発的な出来事に対して安全に対応するためにはもう1名必要だというのが現場の実感。

⇒実際に現場で最低必要な人数（人件費）に介護報酬が見合っていない

⇒経営が困難になる

(2) 「生産性の向上」の推進の強要

令和6年度の介護報酬改定

- ・ ICT機器を導入する入所施設の人員配置の緩和
- ・ 生産性向上推進体制加算の導入

厚労省「介護分野における生産性向上ポータルサイト」

- ・ 今後のさらなる介護ニーズの急増とますますの人手不足への対応策として、「生産性の向上」が必須
 - ・ 介護ソフト、タブレット端末や見守りセンサーの導入等によるICT化を進めていくことで、情報共有を効率化し、チームケアの質を向上させていくことが必要。
 - ・ 日常業務におけるムダやムラを見直し、業務の効率化に取り組んでいくことで、介護職員の業務負担を軽減し、働きやすい環境を作っていく。
- ⇒このような取り組みによる「生産性の向上」でムダを無くし、業務が効率化でき、その分、利用者と向き合う時間を増やして、ケアの質を高めることができる、とする。

しかし、業務が効率化されることが直ちに利用者と向き合う時間を増やすことに本当になるのだろうか？

- ・生産性の向上に取り組んだ入所施設の介護職員の人員配置基準を緩和
⇒生産性の向上は、一層の人件費の削減（人減らし）を促進することに繋がりがねない

- ・生産性向上推進体制加算の導入
利用者の安全並びに介護サービスの質の確保及び職員の負担軽減に資する方策を検討するための委員会の開催、生産性向上ガイドラインに基づいた改善活動の継続的实施、業務改善の取り組みによる効果を示すデータの提供が算定要件とされている。

⇒ますます煩雑な事務仕事が増幅していき、利用者に向き合う時間が更になくなる

* 介護保険制度の改定、報酬の改定のたびに、義務化される研修、訓練、委員会等が増えていっている。

⇒そのための計画書や報告書の作成に要する事務仕事に時間が費やされてしまう。⇒利用者に向き合う時間がますます減っていく

そもそも介護現場に「生産性」という言葉を持ち込むこと自体に強い違和感がある。

言葉は、人の価値観や行動に影響を与える。
利用者とのかかわりのなかでも、「効率性」や「生産性」を無意識に重視されかねない。

「非生産的」な職員を追い詰めたり、生きづらくさせてしまう。

人と人とのかかわりの中で営まれる介護という仕事は、非効率的でも、でこぼこがあってもいいのではないか。
むしろ、効率的ではないところから偶然生まれるかかわりにこそ、「喜び」「あたたかみ」「希望」があるのではないか？

高齢者は、「生産性のない人」「社会のお荷物」として、容赦ないバッシングを浴びせられたり、社会から切り捨てられたりすることも多々ある。

そうした社会の価値観が高齢者自身をも呪縛。

「他人の役に立たなくなったらおしまい」「迷惑をかけないで死にたい」

できたことができなくなっていく自分の老いを受け入れられずに苦しんでいる。

介護現場とは、そのように「生産性」という価値観で排除され苦しむ人たちが集う場所

そこに「生産性」という言葉を持ち込むことで、更に彼らを否定したり、追い詰めたりすることになるのではないか。

(3) 「自立支援」「重度化防止」の推進への疑問

○令和3年度の通所介護の入浴介助加算の見直し

- ・令和3年度以前の入浴介助加算 1回につき50単位（500円・自己負担50円）
利用者の入浴を介助し、安全に本人が安心して入浴を行うことができる。
- ・令和3年度からの入浴介助加算
 - ・従来の入浴介助⇒入浴介助加算Ⅰ 1回につき40単位（400円・自己負担40円）
 - ・自宅での入浴の自立を目標にした入浴介助
⇒入浴介助加算Ⅱ 1回につき55単位（550円・自己負担55円）
- ◇医師等（医師・理学療法士・作業療法士・介護福祉士・介護支援専門員等）による自宅訪問、浴室における利用者の動作及び浴室の環境を評価し、個別の入浴計画を立て、それに基づいて入浴介助を行う。

〈国の主張〉 自立支援、重度化防止の取り組みの推進の一環

○令和6年度の見直し

入浴介助加算Ⅰ 単位数同じ ◇入浴介助に関わる研修の実施が要件

入浴介助加算Ⅱ 単位数同じ

◇医師等が自宅訪問できないときには、介護職員が訪問し、医師等の指示のもと情報通信機器を活用して状況把握を行い、医師等が助言・評価を行えば加算の算定可能。

〈国の主張〉 自立支援、重度化防止の取り組みの推進の一環

〈問題点〉

- ・「自宅で自立して入浴することができる」を目指すことはリスクを高めることになるのではないか。
- ・そもそも、利用者本人や家族は「自宅で自立して入浴することができる」ことを望んでいるのか。利用者や家族が望んでいるのは、安全に気持ちよくお風呂ふ入れ、心身共にリラックスすることができることではないか。

介護保険制度の改定の度に、「自立支援」と「重度化防止」が大きく掲げられ、重点化されている。

ここでいう「自立支援」とは、本人ができるだけ公的サービスに依存しなくても生活できるように機能訓練を行ったり、環境を整えたりすることを指している。そして、自立支援による訓練を続けていけば、重度化が防げるとされている。

→それらは幻想ではないか。あるいは、社会保障費の抑制を誤魔化すためのまやかしではないか。

○私たち介護職員の思い

孤独や困難をかかえながら在宅生活を何とか続けている利用者さんたちが、お風呂に入ることによって疲れた体や心を癒したり、緊張した心身のこわばりを緩めたり、ひと時の幸せを感じてくれる。

それこそがこれからの人生を生きる力に少しでもなるのであれば、私たちに大いに依存してもらいたい。

私たちは利用者さんが気持ちよくなるために体を隅々まで洗ってあげたい。転倒を心配することなく、安心して湯船につかってもらいたい。

それこそが、利用者さんの人生を伴走する私たちの喜びであり、やりがいである。

そんな入浴介助という特別な時間を、本人にさらに頑張りを強いる訓練の場には使いたくないのだ。

つまり、問題は、「介護の仕事の本質は何か？」ということが見失われていることにある。

早い遅いの違いはあれ、人は誰でも平等に老いていく。
できることもあれば、できないことも増えていく。
そして最終的には心身ともに機能は低下し、死を迎えることになる。

誰もが死に向かって人生を下っていくのであれば、私たち介護職が目指すべきことは、そのくだりのプロセスをいかにその人らしく、人として尊重されて、穏やかに、希望をもって、最期まで生ききるか、そのための支援をしていくことではないか。

そして、それは、効率化とか生産性とは正反対の、時間も手間も人手もかかる行為

スタッフみんなで協力して、時間をかけて、利用者さん一人一人に寄り添い、利用者さん同士の結びつきも深くなることで、利用者さんが最期まで希望を持って生きることができれば、自分の仕事や職場への満足感も高まるし、介護の仕事への矜持も生まれるのではないかな。

介護の現場が、利用者さんにとっても、スタッフにとっても、生きやすく、希望を持てる場であるために、生産性、効率化への抗いを続けていきたい。